

# 明治期の華族による考古学研究

——阿部正功子爵と二条基弘公爵の活動を中心に——

平 田 健

**【要約】** 近代日本考古学の確立と普及に尽力した坪井正五郎は、特権階級であった華族ともネットワークを構築し、自身が提唱する「人類学」の普及を行っていた。本稿では明治二〇年代から兆しを見せる華族の考古学研究について、フィールドワークを基礎とした阿部正功子爵と、考古遺物蒐集や同じ趣向をもった華族による派閥（華族人類学会）を構築した二条基弘公爵の実態を史資料から明らかにした。坪井正五郎は華族に考古学の知識を教授し、華族の政治的活動など他分野においても積極的な助言を行った。華族は坪井正五郎の指導のもと、潤沢な資金による調査旅行や資料蒐集、社会的信用を背景に考古学研究を深化させていく。また、金銭的援助や蒐集品の提供、学会での名誉職への就任など、華族は研究者の活動を支援した。「人類学」や考古学という新興学問は、華族という高位のネットワークの中で生涯教育として周知され、様々な場面でその有用性が大衆に宣伝されたのである。

史林 一〇一卷一号 二〇一八年一月

## はじめに

明治維新以後、モールス (Edward Sjöström Morse) やシーホルト (Heinrich von Siebold) ら外国人研究者によって開眼された日本考古学を組織化し、社会に広く周知させたのが坪井正五郎であったことは日本考古学史の定説である。坪井正五郎が提唱した「人類学」は、人類に関する諸疑問を解明する理学として、今日の考古学、人類学、文化人類学及び民族学

などを包括したものであったが、自身の研究は人類由来論<sup>①</sup>、即ち考古学と人類学に主眼が置かれていた。

同じ趣向を持った在野の研究者を主導し、中国人類学会など地方学会を組織、各地の調査情報を『東京人類学会雑誌』に集約したことや、研究成果を講演会や新聞を通じて発信し、児童玩具や学校教材、絵葉書などに応用していたことは先行研究で明らかにされている。<sup>③</sup> 坪井正五郎による「人類学」の普及は、これまで同時代の研究者や平民に対する影響力を中心に評価されてきた。

しかしながら、坪井正五郎はまた、当時の特権階級であった華族とも関係を有し、「人類学」研究のネットワークを構築していた。明治二年（一八六九）の行政官達第五四三号で従来の公卿諸侯を廃して創設された華族は、明治四年（一八七二）の勅旨及び勅諭により、四民の上に立ち、国民中貴重<sup>②</sup>の地位が明確にされた。その後、華族令の制定などにより、身分保障や財産保護など様々な特権が付与されていく。その一方で、政治や経済の中枢を担った華族には、国民の模範として幅広い知識を身につけ、皇室の藩屏に相応しい立ち居振る舞いが求められた。<sup>④</sup>

華族と学問の接点は、こうしたノブレス・オブリージュ（高貴な身分に伴う義務）の一端から派生したものである。ただし、それが殿様芸の域を超えていることは、山階芳麿侯爵の鳥類学や徳川義親侯爵の動物学など生物学の分野で証明されている。<sup>⑤</sup> このことは、考古学においても例外ではなかった。

本稿では、明治期に考古学を研究した華族の中で、特に坪井正五郎と親交の深かった阿部正功子爵と二条基弘公爵について、具体的な調査や研究活動を復元することを第一の目的とする。そして、その研究活動における坪井正五郎の役割に言及するとともに、学問を通じて形成された特権階級との交流が、「人類学」や考古学の普及にどの様に作用したかを明らかにしていきたい。

なお、本稿では煩雑になるため敬称を略した。また、今日では蔑称となる用語についても、歴史的事実としてそのまま用いたことを御了承頂きたい。

① 坪井正五郎「人類学の眞正の性質」『人類学叢話』一九〇七年、一八九―二〇一頁、博文館

なお、坪井正五郎が提唱した人類学は、現在の人類学と学問領域が異なるため、本稿では「人類学」と括弧書きで表記する。

② 平田健「絵葉書で綴る日本考古学史(二) 絵葉書の哀歌 坪井正五郎(二)」『日本考古学史研究』第二号、二〇一四年、五九―七四頁、日本考古学史学会

③ 川村伸秀「坪井正五郎 日本で最初の人類学者」二〇一三年、弘文堂

平田健「日本考古学史における近世と近代」『考古学ジャーナル』第六八六号、二〇一六年、一三一―一七頁、ニューサイエンス社

④ 小田部雄次『華族 近代日本貴族の虚像と実像』二〇〇六年、中央公論新社

⑤ 『科学朝日』編『殿様生物学の系譜』一九九一年、朝日新聞社

## 第一章 阿部正功子爵の考古学研究

### 第一節 阿部正功子爵の経歴と先行研究

阿部正功子爵は、万延元年(一八六〇)、阿部家一五代当主正者の二男として生まれ、明治元年(一八六八)に八歳で陸奥棚倉藩二代藩主、翌明治二年(一八六九)には棚倉藩知事に任命された。棚倉藩知事時代には藩校修道館の再興に努めたが、明治四年(一八七二)の廢藩置県に伴い免官。明治一七年(一八八四)七月八日に子爵を授与されたほかは、主だった官職に就いた記録はなく、麻布区(現、港区)霞町の広大な敷地の宅地開発に着手するなどしている。大正一四年(一九二五)六五歳で歿した。

慶応二年(一八六六)にイロハ四八文字や儒学、漢学を学び始めたのを筆頭に、明治四年(一八七二)に洋学を学び、明治六年(一八七三)には慶應義塾、明治一〇年(一八七七)に箕作秋平が開塾した三又学舎に入塾するなど、幼少期から青年期にかけてあらゆる基礎学問を修めた。<sup>①</sup>

明治一五年(一八八二)、北澤正誠及び松平春嶽の紹介で地学協会に入会。明治二〇年(一八八七)六月二八日の坪井正

五郎による「伊豆諸島風俗談」<sup>②</sup>を聴講後、棚倉より持参した軒丸瓦の鑑定を乞うたことが、坪井正五郎との最初の交誼となった。ただし、坪井正五郎は明治一九年（一八八六）に同会で「東京近傍貝塚総論」を報告しており、阿部正功子爵と考古学の邂逅は、あるいはこの時期まで遡るかもしれない。東京人類学会には明治二三年（一八九〇）に入会<sup>⑤</sup>。

阿部正功子爵の考古学的活動については、その生涯と併せた詳細な考証が丸山美季によりなされている。また、阿部正功子爵の調査活動に関して、邸宅のあった港区の郷土史に、麻布学として意義付けを行った高山優の論考や、旧領地の棚倉町崖ノ上遺跡（比丘尼堂遺跡）調査に関する特別展や日記類の翻刻など、個々の調査事例を地域史の中で評価する動きが盛んである。<sup>⑨</sup>

本章では、こうした先行研究に基づき、一次史料である『陸奥国棚倉藩主・華族 阿部家資料』や『東京人類学会雑誌』など該期に発行された刊行物から阿部正功子爵の考古学研究を復元することとする。

## 第二節 阿部正功子爵のフィールドワーク

明治二一年（一八八八）九月に若林勝邦と踏査した大田区千鳥窪貝塚<sup>⑩</sup>を筆頭に、約一〇年に亙り阿部正功子爵が踏査した遺跡は極めて膨大な数に及ぶ。<sup>⑪</sup>調査対象は主に縄文時代の貝塚や遺物包蔵地であるが、港区芝丸山古墳<sup>⑫</sup>などの古墳や横穴、自邸敷地内での改築工事に伴い発見された近世の地下室なども発掘している。発掘調査に際しては、特に層序を詳細に観察し、記録を作成した。

東京都内においては、邸宅から最も近い港区青山墓地内貝塚、長者ガ丸貝塚、青山六丁目貝塚をはじめ、渋谷区豊沢貝塚、品川区上大崎貝塚、目黒区東山貝塚、大田区下沼部貝塚、文京区小石川植物園貝塚、荒川区延命院貝塚、北区西ヶ原貝塚、板橋区小豆沢貝塚、日野市七ツ塚古墳群、八王子市榎原遺跡など学史的に著名な遺跡を早い段階から踏査している。調査成果は東京人類学会の例会で報告された（表1）。例えば明治二五年（一八九二）七月三日の第七八会での談話「下

表1 阿部正功子爵の考古学・人類学関係学会活動

年	月 日	記 事	掲載誌
明治23年	2月	東京人類学会（以下、東人という）入会	『東誌』5-47
明治24年	10月4日	東人第71会で上野伊香保のケズリカケ3種陳列、寄贈	『東誌』7-67
明治25年	7月3日	東人第78会で「下総古作村ノ貝塚武蔵西ヶ原村ノ貝塚ノ採集品」談話 古作貝塚出土凹石、西ヶ原貝塚出土土器口縁寄贈	『東誌』7-76
	12月4日	東人第81会で「下総国東葛飾郡山崎村ノ貝塚」談話	『東誌』8-81
明治26年	1月	下総国東葛飾郡向宿出土土器1箱、武蔵国荏原郡宮ノ上貝塚出土獣骨1箱、西ヶ原貝塚出土赤彩土器2片及び貝殻1個寄贈	『東誌』8-82
	9月3日	東人第88例会で「埼玉県下ノ遺跡」談話	『東誌』8-90
	9月	武蔵国荏原郡千鳥久保出土土器7片、武蔵国橋樹郡箕輪出土土器1片寄贈	
	10月	東人創立第9年会で中央委員に新選	
明治27年	12月3日	東人第91例会で「北足立郡小谷場村ノ貝塚」談話	『東誌』9-93
	4月1日	東人第95例会で「水戸地方の遺跡」談話	『東誌』9-97
	5月6日	東人第96例会で「庄内地方ノ土俗ニ就テ」談話	『東誌』9-98
明治28年	6月	武蔵国荏原郡野澤出土土器及び石器片数十個寄贈	『東誌』9-99
	1月	東人に10円寄付	『東誌』10-106
	5月5日	東人第106例会で「武蔵国秩父地方人類学探験ノ大畧」談話	『東誌』10-110
明治29年	8月25日	第3回土俗会出席	『東誌』11-115
	1月5日	第1回集古懇話会出席、50銭寄付	『東誌』11-121
	4月18日	第2回集古懇話会出席、趙明刀出品	
	4月26日	第3回集古懇話会出席	
	10月4日	東人第119例会で「相州箱根近傍見聞談」談話	『東誌』12-127
	11月28日	『集古会誌』発刊に際し2円寄付	『東誌』12-130
明治30年	12月	考古学会設立に際し2円寄付	『考会誌』1-1
	7月3日	第10回集古会に古瓦6片出品	『集誌』2
明治31年	8月7日	第5回土俗会発起人となる	『東誌』12-136
	4月	『集古会誌』第2輯発刊に際し2円寄付	『集誌』2
明治32年	6月	『集古会誌』第3輯発刊に際し2円寄付	『集誌』3
	12月3日	東人第151例会で「京都地方土俗品説明」談話	『東誌』15-165
明治33年	3月4日	東人第154例会で「京都附近の古墳談」談話	『東誌』15-168
	12月20日	貝塚土器12個、石鏃6個、管玉7個寄贈	『東誌』16-182
	12月30日	集古会名誉会員となる	『集古会記事』
明治44年	1月15日	考古学会退会	『考誌』1-5
大正3年	4月	故理学博士坪井正五郎君記念資金募集発起人となり、5円出金	『人誌』29-4

掲載誌凡例 『東誌』：『東京人類学会雑誌』、『考会誌』：『考古学会雑誌』、『集誌』：『集古会誌』、『考誌』：『考古学雑誌』、『人誌』：『人類学雑誌』

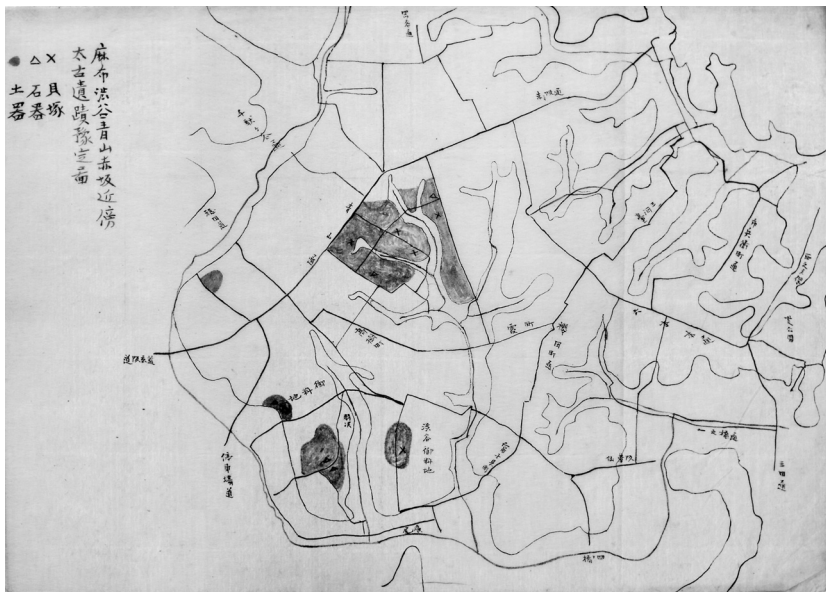


図1 『麻布渋谷青山赤坂近傍太古遺跡予定図』 個人蔵・学習院大学史料館保管

総古作村ノ貝塚武蔵西ヶ原村ノ貝塚ノ採集品」は、同年五月二一日「下総国東葛飾郡奉免・古作諸村の丘頂」、六月七日「武蔵国北豊島郡池袋・小豆沢・十条・西ヶ原諸村」踏査の報告である。採集品のうち、古作貝塚出土凹石及び西ヶ原貝塚出土土器は例会で供覧された後、東京人類学会に寄贈された。

踏査した遺跡が新発見であった場合は、坪井正五郎や東京人類学会に逐次報告し、『東京人類学会雑誌』雑報欄に掲載されることもあった<sup>15)</sup>。その成果は、当時東京大学理科大学人類学教室が主体となって編纂された『日本石器時代人民遺物発見地名表』（明治三〇年初版）及び『古墳横穴及同時代遺物発見地名表』（明治三三年初版）に反映されている。石器時代<sup>16)</sup>では磐城国（三遺跡）、三河国（二遺跡）、相模国（三遺跡）、武蔵国（五九遺跡）、下総国（二遺跡）が、古墳時代では磐城国（三遺跡）、相模国（一遺跡）、武蔵国（一九遺跡）が「阿部正功報」となっている<sup>17)</sup>。阿部正功子爵の踏査は、現在の港区、渋谷区及び大田区や、八王子市、日野市を含む旧南多摩郡における遺跡調査の黎明に位置付けることができる。

阿部正功子爵は、遺跡踏査の成果を地図上に図示することも行っている。明治二五年(一八九二)三月調製『青山近傍遺跡散布之畧図』<sup>18)</sup>は、青山通り、六本木通り及び古川(渋谷川)に囲まれた範囲の地形図に、貝塚や土器、石器の散布地をプロットしたものである。また、同時期に作図されたと考えられる『麻布渋谷青山赤坂近傍太古遺跡予定図』(図1)<sup>19)</sup>は、地形図に主要幹線道路を朱書きしたものを下図に、貝塚や石器の発見場所と土器の散布地から、遺跡の範囲を面的に示した地図である。

これら図面から、阿部正功子爵は石器時代遺跡を地勢との関係で捉えようとしていたことがわかる。『日本石器時代人民遺物発見地名表』など理科大学人類学教室の調査成果に基づき、大野延太郎が日本地図上で「石器時代遺跡分布略地図」<sup>20)</sup>を発表したのが明治三七年(一九〇四)である。「石器時代遺跡分布略地図」や当該期の雑誌に掲載された分布図は、遺跡の場所を点で示すものが主流で、遺跡範囲を面的に示そうと試みた阿部正功子爵の作業は、現在の遺跡地図という発想の原初に位置付けることができよう。

### 第三節 陳列場の開館

阿部正功子爵の資料収集は、表面採集や時に数メートル四方の試掘坑を掘削するものであった。<sup>21)</sup>明治二二年(一八八八年)九月の大田区千鳥窪貝塚調査では、若林勝邦と土器や石器を塩俵一俵程持ち帰っており、その量から考えて、完形品や文様の優れたものなど、遺物を選別するようなことはしていなかったと思われる。

資料はこの他、寄贈や購入により集められた。『寄贈並二買入之部』<sup>22)</sup>によると、明治二五年(一八九二)一〇月一六日の「野田町南方江戸川東岸丘頂」<sup>24)</sup>踏査の際、千葉県山崎貝塚出土の香炉形土器、ナツメ形小壺及びドンブリ形土器を山崎村住人の中村軍蔵から購入しており、フィールドワークの際に地主や地元住人から購入や寄贈を受けていたことがわかる。磐城国西白河郡の旧領地や、中世阿部氏が居館を構え、阿部忠正及び一族の墓所がある三河国碧海郡小針村の旧家臣など



図2 長者ガ丸貝塚出土磨製石斧 (S=1/2) 京都大学総合博物館所蔵

からの献納品も多い。

また、目黒区駒場出土縄文土器片及び石器、港区長者ガ丸貝塚出土磨製石斧、隠岐島海土村出土須恵器<sup>25</sup>は阿部正功子爵の大叔父に当たる阿部資満から寄贈されたものである。このうち長者ガ丸貝塚出土の磨製石斧(図2)は明治二十七年(一八九四)五月に鳥居龍蔵と大野延太郎が訪問した際に一覽しており、「緑色の光沢ある、頗る美麗な石斧<sup>26</sup>」として当時から研究者の間で有名な遺物であった。阿部資満は明治五年(一八七二)生まれで、阿部正功子爵とは四歳違いである。「同子爵が最も愛蔵されてある、磨製石斧<sup>27</sup>」には、石斧の形状や色調以上に、同族で歳の近い考古学の同好者から寄贈されたことに価値があったと思われる。

古美術商やコレクターから購入した遺物は、明治三十一年(二八九八)八月に八木契三郎の紹介で相馬商人からの「相馬地方古墳取出 古墳物玉類一連<sup>28</sup>」、明治三十三年(一八九九)二月に毛利昌教の世話、鈴木清聰の紹介で青森人某からの「亀岡村取出 縄紋土器二十三個(悉ク完全品)<sup>29</sup>」二件のみである。

明治三〇年(一八九七)、阿部正功子爵はこれら収集資料を展示するための陳列場を邸内に建設した。収蔵品は考古遺物のほか、諸国の農具、漁具、蓑笠や脚絆などの日用器具及び玩具など民俗資料数百点に及ぶ。<sup>30</sup>

陳列場は同好の士に公開されていた。『陳列場參觀人人名簿<sup>31</sup>』によると、山中笑、鳥居龍蔵、八木契三郎、蒔田鎗次郎、野中完一、毛利昌教、関保之助、大菊七郎兵衛、林若吉、原秀四郎、佐藤伝蔵、水谷乙次郎(幻花)ら東京人類学会会員、





1



2

図3 阿部正功子爵邸内陳列館写真 京都大学総合博物館所蔵

相良頼紹子爵、加藤泰秋子爵、徳川達孝伯爵、柳原義光伯爵ら華族の参観があった。

陳列場内部については、これまで『東京人類学会雑誌』雑報欄の記事などわずかな手掛かりしかなかった。<sup>22)</sup> 今回、昭和十一年（一九三〇）に阿部正功子爵収集資料の大半が寄贈された京都帝国大学文学部考古学教室（現在は京都大学総合博物館所蔵）に写真三葉が収蔵されていることが判明した（図3）<sup>23)</sup>。写真によると室内は洋間で、床に莫塵を敷き中央部には絨毯がみられる。資料は四周壁際に置かれており、観覧者は壁に沿って資料を縦覧するか、手許で観察したい場合は絨毯に座して閲覧したものと思われる。

考古遺物のうち、完形品は外函の上や砂を敷いた木箱に入れ、それ以外は直置きである。図3—1の写真奥に見られる縄文時代晩期の小型壺形土器類は、明治三十二年（一八九九）二月に毛利昌教の世話で購入したものである。土器片は木箱に一括収納され、石器は木板などに紐で縛り付け、重箱に入れるか木棚に平置きしている（図3—2）。木箱内に木札が確認できることから、採集した遺跡毎に分類されていたことがわかる。また、遺愛の磨製石斧表面には「長者ガ丸／邸内貝塚／明治二十六」と判読できるラベルが貼付されており（図2）、遺物には出土地と採集年月日が明示されていた。

収蔵品は阿部正功子爵自身の採集によるものが大半で、完形品や美術的な優品は少なかった。これは、阿部正功子爵の考古学研究が遺跡の分布調査であったためで、陳列場は『日本石器時代人民遺物発見地名表』や『古墳横穴及同時代遺物発見地名表』に登載された遺跡の存在や内容を担保する、遺物標本室の役割を担っていたのである。

#### 第四節 学会活動

明治三三年（一八九〇）東京人類学会に入会した阿部正功子爵は、明治二六年（一八九三）に中央委員候補者に申し込み、創立第九年会で新選された（表1）。同年から翌年にかけては第九一、九五、九六例会と頻繁に例会に参加し、フィールドワークの成果を報告している。学会運営への関与は明らかではないが、明治二八年（一八九五）には東京人類学会に一

○円を寄付するなど、資金面での援助を行っていた。

また、明治三十三年(一九〇〇)一二月には、貝塚土器一二個、石鏃六個及び管玉七個(価格二〇円)を東京帝国大学に寄付している。<sup>34</sup>これらは、明治三十一年(一八九八)と明治三十二年(一八九九)に八木契三郎や毛利昌教の斡旋で購入したものと恐れ、自身が採集した資料のみならず、完形品や管玉など参考品を研究資料として提供していた。

明治二十八年(一八九五)には、鳥居龍蔵が主催した土俗会へも参加。土俗会は夏期講習会などで上京していた人々を一堂に会し、「其地方に行はる、風俗習慣言語口碑の事など談し合ひなば土俗研究上少なからざる有益の材料を得るならん」という趣意で開催された。第五回土俗会では鳥居龍蔵や山中笑とともに、「日本諸地方の食事に關する事実」<sup>35</sup>という企画を行つてゐる。

同好者が古器物を持ち寄り自由に品評する集古懇話会(集古会)にも発会当初から参加し、「趙明刀」(第一回)や「磐城国西白河郡借宿村」ほか出土古瓦(第一〇回)など収蔵品を出品している。そして、『集古会誌』発刊に際し、各号二円ずつ寄付を行つた。

このほか、考古学会設立時にも寄付を行うなど、阿部正功子爵が学会や研究者に対する支援者であつたことは既に指摘されている。<sup>36</sup>しかし、明治二十八年(一八九五)四月に鳥居龍蔵、大野延太郎と同行した秩父地方人類学調査では、全行程の旅費を負担しつつ、阿部正功子爵自身も表面採取や古墳踏査を行い、その成果を連名で『東京人類学会雑誌』<sup>37</sup>に報告している。また、資金難に陥つた集古懇話会(集古会)を立て直すため、会長就任の依頼をされた際には、「君等は僕が華族であるから金でも出させ様との腹かも知れぬが、華族程金の制限を受けるものはなく、其制限内の分は逆も他を助くる訳に行ぬ」<sup>38</sup>と断つてゐる。集古懇話会(集古会)では、この頃から近世の千社札や玩具人形などが持ち寄られ、古物趣味者の娯楽場へと変わつていったようで、研究支援には、その内容が学界全体や阿部正功子爵自身の調査研究に益するものかという一定の判断基準があつたのである。

阿部正功子爵の考古学研究は、フィールドワークを通じて新たな遺跡を発見することに主眼が置かれていた。現場を自身で確かめるという姿勢は、明治二十七年（一八九四）に浅草公園内で興行中のサイパン先住民族への聞き取り調査や、多摩川沿岸や下谷地区での風俗調査<sup>⑤</sup>など、あらゆる研究活動に通底する。

遺跡は地勢との関係で捉えられ、平面的な範囲として認識された。踏査などで採集された遺物の大半が土器片や石器であることは、遺物採集が遺跡の時代や性格の把握を目的としていたことを意味している。

新発見の遺跡は東京人類学会に逐次報告された。その成果は、『日本石器時代人民遺物発見地名表』や『古墳横穴及同時代遺物発見地名表』の編纂に寄与している。そして、明治三〇年（一八九七）に開館した陳列場は、一部関係者には公開されていたものの、阿部正功子爵が発見した遺跡のタイプ標本を収蔵する施設であった。

このように、阿部正功子爵の研究活動は、今日の考古学の基礎研究であり、調査方法など日本考古学史においても先駆的な業績を残したと評価できる。その業績がここ数年でようやく注視されるようになったのは、阿部正功子爵が調査成果を積極的に公刊しなかったことや、基礎研究であったが故に、当時の考古学研究の主要テーマであった日本人種論争の陰に埋もれてしまったことに起因するのである。

- ① 阿部正靖氏寄託・学習院大学史料館所蔵阿部家史料六三二—二（以下、阿部家史料「番号」と明記する）。
- ② 岳総治編「明治二十年六月 東京地学協会録事」『東京地学協会報告』第九卷第三号、一八八七年、一頁、東京地学協会
- ③ 坪井正五郎は「紋形ハ菊ニテ武蔵多摩郡府中古趾より出ル品ト同種」と鑑定している。
- ④ 阿部家史料六三二—
- ⑤ 坪井正五郎「東京近傍貝塚総論」『東京地学協会報告』第八卷第四号、一八八六年、三一—〇頁、東京地学協会
- ⑥ 鈴木寿太郎編「新入会員」『東京人類学会雑誌』第五卷第四七号、一八九〇年、一三八頁、東京人類学会事務所
- ⑦ 丸山美季「阿部正功の生涯と学問——人類学・土俗学・考古学

- 『学習院大学史料館紀要』第一七号、二〇一一年、二七—四〇頁、学習院大学史料館
- ⑦ 高山優「『芝罘山古墳調査略記』について」『学習院大学史料館紀要』第一七号、二〇一一年、四一—五八頁、学習院大学史料館
- 高山優「阿部正功の麻布学——華族による郷土史研究の一例——」(一)『研究紀要』一四、二〇一二年、五八—六六頁、港区立港郷土資料館
- 高山優「阿部正功の麻布学——華族による郷土史研究の一例——」(二)『研究紀要』一五、二〇一三年、一七—三五頁、港区立港郷土資料館
- ⑧ 「ふくしま考古学研究所の春暁——棚倉式土器の発見・新地貝塚の発掘——」二〇一二年、財団法人福島県文化振興事業団
- 山田英明・石田純平「『史料紹介』阿部正功の棚倉式土器発掘について——明治三十二年の福島県紀行——」『福島史学研究』第九五号、二〇一七年、七九—九四頁、福島県史学会
- ⑨ この他、阿部正功子爵に関する先行研究には以下のものがある。
- 石尾和仁「阿部正功と鳥居龍藏の交流——『秩父地方探見録』の紹介をかねて——」『学習院大学史料館紀要』第一七号、二〇一一年、八九—九七頁、学習院大学史料館
- 丸山美季「史料紹介 阿部正功著『棚倉紀行』」『学習院大学史料館紀要』第一九号、二〇一三年、九五—一〇七頁、学習院大学史料館
- 丸山美季「史料紹介 阿部正功の誕生と成長の記録(一)——白河藩侍医の日記より——」『学習院大学史料館紀要』第二二号、二〇一五年、一五七—一七〇頁、学習院大学史料館
- 早坂広人「阿部正功の人類学と荒川右岸」『あらかわ』第一六号、二〇一五年、五三—八八頁、あらかわ考古談話会
- 山田英明・和田伸哉「元棚倉藩主阿部正功の収集遺物に関する予備的考察——3種の『遺物目録』を手がかりに——」『福島県文化財センター白河館 研究紀要』二〇一五、二〇一六年、一〇五—一〇頁、公益財団法人福島県文化振興財団、福島県文化財センター白河館
- ⑩ 内山九三郎「武蔵国荏原郡調布村字峯千鳥久保遺跡発掘」『東京人類学会雑誌』第八卷第八六号、一八九三年、三〇八—三二二頁、東京人類学会事務所
- ⑪ 前掲早坂広人「阿部正功の人類学と荒川右岸」に明治二年(一八八八)以降の遺跡調査及び旅行記一覽が掲載されている。
- ⑫ 前掲高山優「芝罘山古墳調査略記」について
- ⑬ 前掲高山優「阿部正功の麻布学——華族による郷土史研究の一例——」(一)
- ⑭ 註⑥に同じ。
- ⑮ 阿部正功「埼玉県下ノ遺跡」『東京人類学会雑誌』第八卷第八八号、一八九三年、四三〇頁、東京人類学会事務所
- 阿部正功「貝塚土器塚。横穴。所在地名表」『東京人類学会雑誌』第八卷第九〇号、一八九三年、五一—五二頁、東京人類学会事務所
- 阿部正功「武蔵北足立郡貝塚所在地名」『東京人類学会雑誌』第九卷第一〇〇号、一八九四年、四二〇頁、東京人類学会事務所
- 八木契三郎編「遺跡地名」『東京人類学会雑誌』第九卷第一〇一—一〇九頁、東京人類学会事務所
- 阿部正功「石器時代遺跡地名表」『東京人類学会雑誌』第一〇卷第一〇六号、一八九五年、一七四頁、東京人類学会事務所
- ⑯ 野中完一編「日本石器時代人民遺物発見地名表」第二版、一八九八年、東京帝国大学
- ⑰ 八木契三郎・蒔田鎗次郎編「古墳横穴及同時代遺物発見地名表」一九〇〇年、東京帝国大学

- ⑱ 阿部家史料一三六一
- ⑲ 阿部家史料一五四八
- ⑳ 大野延太郎『先史考古図譜』一九〇四年、高山房
- ㉑ 前掲『ふくしま考古学研究の春暁——棚倉式土器の発見・新地貝塚の発掘——』
- ㉒ 註⑩に同じ。
- ㉓ 阿部家史料一三七〇—三
- ㉔ 註⑥に同じ。
- ㉕ 港区長者ガ丸貝塚は当時、旧白河藩士で衆議院議員の安川繁成邸内にあった。本須恵器は阿部資満が安川邸内を踏査した際に寄贈されたもので、明治廿一年八月二十日鳥根県書記官中條氏ヨリ安川氏へ送与ノ品ニシテ出所ハ後鳥羽院行在所ノ地ヨリ出タル」ものであった。
- 註⑲に同じ。
- ⑳ 大野延太郎『東京市附近の遺跡と遺物』『土中の文化』一九三二年、一—一五頁、春陽堂
- ㉗ 註⑲に同じ。
- ㉘ 註⑲に同じ。
- ㉙ 註⑲に同じ。
- ㉚ 「府下の奇癖家(廿六) 田舎風俗癖 阿部子爵」『東京朝日新聞』第五〇八二号、一九〇〇年、五頁、東京朝日新聞会社
- ㉛ 阿部家史料一四一一—
- ㉜ 八木契三郎編『本会員藏品陳列所の新設』『東京人類学会雑誌』第一三巻第一四二号、一八九八年、一六三—一六四頁、東京人類学会事務所
- ㉝ 丸山美季氏の御教示により筆者が資料調査を行い、複写した。撮影は東京市麻布区六本木の新宮館、写真は縦一〇・七センチメートル、横一五・二センチメートルのK G判、一葉ずつ台紙に貼り付けられて
- いる。
- なお、未掲載の一葉には、千葉県上新宿貝塚出土深鉢形土器や須恵器長頸壺など完形品の考古資料や、民俗資料が写されている。
- ⑳ 「賞与上申 帝国大学へ物品 阿部正功」『東京府文書』六二五、A五、三一、東京都公文書館所蔵
- ㉑ 鳥居龍蔵他「土俗会談話録(羽前、越後、信濃、肥後の正月其他)」『東京人類学会雑誌』第九巻第九四号、一八九四年、一四四—一五一頁、東京人類学会事務所
- ㉒ 八木契三郎編『日本諸地方の食事に関する事実』『東京人類学会雑誌』第一二巻第一三六号、一八九七年、四—一頁、東京人類学会事務所
- ㉓ 下村三四吉編『本会記事』『考古学会雑誌』第一編第一号、一八九六年、四四—四五頁、考古学会
- ㉔ 前掲丸山美季「阿部正功の生涯と学問——人類学・土俗学・考古学——」
- ㉕ 前掲高山優「芝刈山古墳調査略記」について」
- 前掲早坂広人「阿部正功の人類学と荒川右岸」
- ㉖ 鳥居龍蔵『ある老学徒の手記 考古学とともに六十年』一九五三年、朝日新聞社
- ㉗ 前掲石尾和仁「阿部正功と鳥居龍蔵の交流——『秩父地方探見録』の紹介をかねて——」
- ㉘ 阿部正功・大野延太郎・鳥居龍蔵「秩父地方に於ける人類学的旅行」『東京人類学会雑誌』第一〇巻第一一〇号、一八九五年、二九三—三二七頁、東京人類学会事務所
- ㉙ 八木静山「明治考古学史」『ドルメン』第四巻第六号、一九三五年、九—二四頁、岡書院
- ㉚ 註④に同じ。

④3 日清戦争直後の明治二八年(一八九五)八月、鳥居龍蔵の遼東半島調査費用の一部を支援している。

阿部家史料六四〇

鳥居龍蔵「学界生活五十年の回顧(一)」「ミネルヴァ」第一巻第八

号、一九三六年、一七頁、翰林書房

④4 阿部正功「南洋サイパン島ノ土俗」『東京人類学会雑誌』第九巻第

一〇二号、一八九四年、四六二―四六六頁、東京人類学会事務所

八木契三郎編「サイパン島土人の名」『東京人類学会雑誌』第一〇

巻第一〇三号、一八九四年、四二頁、東京人類学会事務所

④5 「府下の奇癖家(三十) 田舎風俗癖 阿部子爵」『東京朝日新聞』

第五〇八六号、一九〇〇年、五頁、東京朝日新聞会社

## 第二章 二条基弘公爵の考古学研究

### 第一節 二条基弘公爵の経歴と先行研究

二条基弘公爵は安政六年(一八五九)、九条尚忠の八男として生まれ、明治四年(一八七二)に二条斎敬の養子となり二条家を継いだ。育英義塾英語学校や同人社で修学し、明治一七年(一八八四)七月七日に公爵を授与される。明治二〇年(一八八七)から英国ケンブリッジ大学に留学し、明治二二年(一八八九)帰国後は貴族院議員に任命された。

明治四〇年(一九〇七)に宮中顧問官となり、大正五年(一九一六)までその責を務めている。大正七年(一九一八)に退隠し、次男厚基に譲爵。その後は大正一二年(一九二三)に春日神社宮司を歴任、昭和三年(一九二八)四月に九〇歳で歿した。

考古学との邂逅は阿部正功子爵同様、坪井正五郎を介してである。明治三二年(一八九九)一〇月二三日に蜂須賀正韻侯爵、浅野長之侯爵らとともに、坪井正五郎、蒔田鎗次郎、鳥居龍蔵、野中完一、人見秀明及び根岸武香と北区西ヶ原貝塚を踏査したのが嚆矢である。①十一月二五日には、更に二人の華族と連れ立って、西ヶ原貝塚を再踏査している。②

明治三四年(一九〇二)、坪井正五郎の紹介で東京人類学会に入会、③大正二年(一九一三)の年会で選挙により東京人類



図4 『石器時代人民生活状態想像図』 Image: TNM Image Archives

学会評議員を委嘱されている。明治三五年（一九〇二）からは、月二回、華族会館に坪井正五郎を招いて人類学講習会を開催<sup>⑤</sup>、聴講者は二条基弘公爵、徳川頼倫侯爵、浅野長之侯爵、蜂須賀正韻侯爵及び徳川達孝伯爵の五名で、この講習会が後に華族人類学会となった。同時期に東京府牛込区（現、新宿区津久戸町）の邸内に銅駝人類学室（後に銅駝坊陳列館）を設置し、野中完一に資料収集や整理を委嘱した。<sup>⑥</sup>

また、明治四〇年（一九〇七）には、東京勸業博覧会美術館の審査に落選した織田明（東馬）画『石器時代人民生活状態想像図』（図4）を買い上げるなど<sup>⑦</sup>、研究者や芸術家の援助も積極的に行っている。

二条基弘公爵の考古学研究については、筆者が角田文衛旧蔵の二条基弘公爵宛坪井正五郎自筆書簡（図9）を史料紹介した際に概略を述べたほか<sup>⑧</sup>、野中完一の銅駝人類学室（銅駝坊陳列館）での資料収集や整理方法を、資料に付されたラベルなどから復元した佐々木利和の先行研究<sup>⑨</sup>以外を確認できていない。従って、その考古学研究については本稿で詳細を明らかにしていくこととする。



## 第二節 二条基弘公爵のフィールドワーク

明治三二年(一八九九)一〇月二三日の北区西ヶ原貝塚踏査が、二条基弘公爵の最初の考古学調査であることは先述した。その後、二条基弘公爵は、明治三九年(一九〇六)、今西龍が発掘していた茨城県神生貝塚を坪井正五郎らと訪問、途中東栗山貝塚で表面採集を行っている<sup>⑩</sup>。

神生貝塚では、最初に今西龍と柴田常恵が発掘し、後着した二条基弘公爵と坪井正五郎が一〇坪余りを調査している<sup>⑪</sup>。

二条基弘公爵は貝層中からミミズク形土偶を発掘、出土した土偶四個は銅駝坊陳列館と人類学教室に二個ずつ分配された。明治四一年(一九〇八)一月には、児島惟謙邸内に広がっていた品川区大森貝塚の調査にも参加している<sup>⑫</sup>。これは東京

朝日新聞社の水谷乙次郎(幻花)と杉村廣太郎(楚人冠)の斡旋によるもので、二条基弘公爵と坪井正五郎、そして江見忠功(水蔭)が発掘の機会が与えられた。一番に児島惟謙邸を訪れたのは水谷乙次郎(幻花)と江見忠功(水蔭)で、後に車夫を従えた二条基弘公爵が到着。自ら発掘したものの、動物の大腿骨を土偶と見間違えるなど、成果はなかった。

このほか、明治三七年(一九〇四)には東京人類学会創立満二〇年記念遠足に、徳川頼倫侯爵、蜂須賀正韻侯爵、徳川達孝伯爵らと参加し、自身や家従を指揮して発掘を行っている<sup>⑬</sup>。二条基弘公爵が発掘した遺跡は、当時においても学界に知られた遺跡が多い。そして、その調査方法は坪井正五郎ら人類学教室に発掘のコーディネートを依頼し、調査地点の選定や表土層の掘削を人類学教室員が行った後、自らが遺物を採集するというもので、遺物収集という性格が強い調査であった。

## 第三節 銅駝人類学室(銅駝坊陳列館)の開館

明治三五年(一九〇二)、二条基弘公爵は人類学上の標本収集のため、東京府牛込区邸内に銅駝人類学室を開設した<sup>⑭</sup>。翌

明治三六年（一九〇三）台湾原住民族資料一七一点、明治三八年（一九〇五）四月に北海道アイヌ民族資料三七一点など、民族資料や考古遺物を購入している。<sup>15)</sup>

明治三八年（一九〇五）四月一日より各種標本整理を開始。銅駄人類学室から銅駝坊陳列館<sup>16)</sup>に改称し、この日を創立記念日とした。設立趣意は「広ク考古学上ノ参考資料トナルベキ標品ヲ収集スル傍ラ人類学上ノ参考品ヲモ合セテ收藏スルニアリ<sup>17)</sup>」とあり、銅駄人類学室時代の民族資料から考古資料へと収集対象が変化していることがわかる。資料の購入はその後も続き、明治三九年（一九〇六）に蘭方医柏原学而旧蔵の古墳時代遺物九八点、明治四一年（一九〇八）に尾張熱田発掘の弥生土器など二九八点をコレクションに加えた。

銅駝坊陳列館開館とはほぼ同時期に、資料収集や整理を野中完一に委嘱した。野中完一は明治四〇年（一九〇七）、坪井正五郎の第一回樺太南部調査に同行し、ススヤ貝塚などを発掘<sup>18)</sup>。石器や土器、骨角器など考古遺物約二〇〇点をはじめ、樺太原住民の風俗参考品を持ち帰っている。同年と翌明治四一年（一九〇八）には岩手県中沢浜貝塚を発掘し、約二三体の人骨を収集した。<sup>19)</sup>貝製腕輪が嵌められた状態の上腕骨や土器棺に納められた幼児骨、赤く染まった人骨など、収集品は人類学研究において貴重な標本であった。また、各地に嘱託員を置く計画もあり、明治四二年（一九〇九）七月に北海道庁の河野常吉に遺跡遺物調査並びに各種標本収集を委嘱している。

銅駝坊陳列館では史資料の寄贈も積極的に受けた。研究者では鳥居龍蔵、蒔田鎗次郎、小金井良精、マンロー (Neil Gordon Munro)、飯島魁、岡倉寛三 (天心)、好古家では江見忠功 (水蔭)、西川勝三郎、簡野啓、郷土史家では青木貞次郎、高島多米治、立川民蔵、鍵谷徳三郎、小平雪人らの名前が「寄贈者芳名」<sup>20)</sup>から看取される。そして、華族からは一条実輝公爵、近衛篤磨公爵、鷹司熙通公爵、浅野長之侯爵、徳川頼倫侯爵、松平康莊侯爵、徳川達孝伯爵、大村純雄伯爵、島津忠亮伯爵、土井利與子爵、曾我祐準子爵、東園基愛子爵、本荘宗義子爵、本多正憲子爵、安藤直行男爵、後藤新平男爵、九条良致男爵らの寄贈を受けていた。明治四二年（一九〇九）時点での収蔵品は、第一部（内外国石器時代遺物）四五六四



図5 宮城県一塚古墳出土家形石棺（木川半之丞撮影）

点、第二部（内外国発掘古墳・古代各種遺物）一四八〇点、第三部（内外国各地民族資料）一四六三点を数える。このうち、寄贈品の占める割合は、第一部が二一%、第二部が二三%、第三部が一%で、第一部と第二部の考古遺物は約二割を占めていた。

学術上貴重な収藏品には、ススヤ貝塚など樺太発見の石器時代遺物、岩手県中沢浜貝塚出土石器時代人骨、千葉県大塚山古墳出土の足結の小鈴が付いた埴輪脚部（明治三十九年西川勝三郎寄贈）、滋賀県三上山出土銅鐸、伝岡山県足守出土銅鐸がある。

また、邸内には宮城県一塚古墳出土の家形石棺が展示されていた（図5）。本石棺は明治三十九年（一九〇六）四月に地主佐藤彌惣吉が発見したもので、六島文鏡など副葬品は東京帝室博物館に、石棺は佐藤彌惣吉と野中完一の協議を経て、明治四〇年（一九〇七）一月に銅駝坊陳列館に寄贈された。<sup>23</sup>

家形石棺は建物に近接した屋根のある場所に置かれ、説明板が掲示されるなど、銅駝坊陳列館の屋外展示であった。こうした石棺の屋外展示は大正四年（一九一五）、京都府久津川車塚古墳出土の長持形石棺を京都帝国大学文学部陳列館中庭



1



2

图6 銅駝坊陳列館五週年紀念繪葉書 筆者所藏

に設置したことが知られているが、本展示はそれに先行するものである。<sup>24)</sup>

銅駝坊陳列館の建物は邸内の日本家屋を修繕したもので、採光や展示台などの点で展示施設としては不十分であった。<sup>25)</sup>館内に展示されていたのは収蔵品の約二分の一であったことから、それ以外の資料を収蔵する施設が別にあったと考えられる。

陳列館は一般公衆には開かれておらず、篤志家のみ事前予約をした上で公開されていた。明治四二年(一九〇九)一月二七日と二八日には開館五周年を記念した石棒及び石剣の特別陳列が開催され、徳川頼倫侯爵や徳川達孝伯爵をはじめ、陳列館に縁故のある百数十名が招待された。二七日の茶話会の席では、二条基弘公爵の開催趣旨説明や坪井正五郎による「石棒考」の講話が行われ、出席者には『銅駝坊陳列館一覽 附本館創立五週年紀念陳列品目錄』及び二葉一組の絵葉書(図6)が配布された。

銅駝坊陳列館所蔵資料は、二条基弘公爵や野中完一による発掘、研究者や華族からの寄贈のほか、古美術商などからの購入が多くを占める。これは、石器時代土器の完形品の大半が「発見地未詳」であることから追証できる。<sup>26)</sup>また、銅鐸や蘭方医柏原学而旧蔵の古墳時代遺物など、二条基弘公爵は美術的且つ歴史的価値の高いものを蒐集していた。

所蔵資料は恒常的に公開されていたわけではなかったが、明治四〇年(一九〇七)東京府主催の東京勸業博覧会で開設された東京府管内太古遺物陳列場に、石器時代の土器や『石器時代人民生活状態想像図』(図4)<sup>27)</sup>を、明治四三年(一九一〇)三月一二日及び一三日に人類学教室内会議室で開催された石器時代土偶研究展覧会に石器時代土面(図6-1)<sup>28)</sup>を出陳するなど、銅駝坊陳列館所蔵の貴重なコレクションはこうした機会を通じて広く公開されたのである。

#### 第四節 学会活動と華族会館

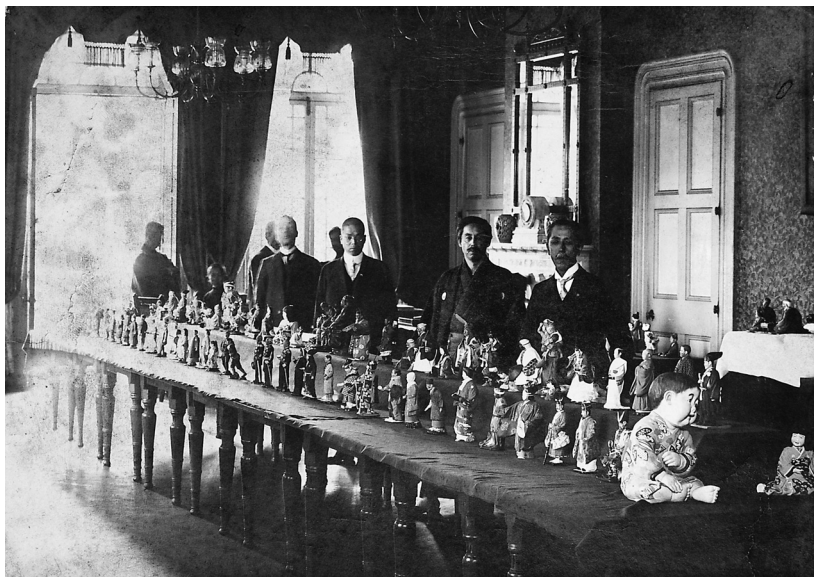
明治三五年(一九〇二)二月、二条基弘公爵を中心に、徳川頼倫侯爵、浅野長之侯爵、蜂須賀正韻侯爵及び徳川達孝伯

爵の五名による人類学講話会が開催された<sup>31)</sup>。人類学講話会は月二回、坪井正五郎を華族会館に招聘して人類学に関する講話を聴講するもので、同年七月三日をもって第一期が終了。第二期は九月以降に開講<sup>32)</sup>、三年後の明治三八年（一九〇五）三月に全ての講義が終了し、これを記念した証牌と襟針が製作された<sup>33)</sup>。また、坪井正五郎の労に謝するため、自得齋梧竹製作のカルトゥーシユ形硯、ピラミッド形糊入れ、スフィンクス形水入れ、オベリスク形筆入れ、パピルス形筆を乾漆製ミイラ棺に入れたエジプト意匠の文房具が講話会に参加した華族一同より贈呈された<sup>34)</sup>。

人類学講話会の講義内容は、『東京人類学会雑誌』第二三卷第二六五号から三年に互り同誌上に連載されている。その内容は「人類学」という学問の定義に始まり、人間の何たるかを調べる人類本質論、諸地方住民の現状を調べる人類現状論、人類と人種の起源を調べる人類由来論といった「人類学」の大意について、具体的な資料を提示しながら詳述されていた。

講話会が開催されて以降、明治三十七年（一九〇四）には徳川頼倫侯爵、浅野長之侯爵、蜂須賀正韻侯爵及び徳川達孝伯爵が東京人類学会に入会<sup>35)</sup>、人類学講話会の参加者により華族人類学会が組織された。千葉県堀之内貝塚で行われた東京人類学会創立満二〇年記念遠足会や、明治三十九年（一九〇六）の東京人類学会満二二年会<sup>36)</sup>への参加を通じ、華族人類学会は当時の人類学界において次第に認知されていく。

ところで、人類学講話会が開かれていた華族会館は、明治四年（一八七一）の華族に対する勅旨及び勅諭を受けて明治七年（一八七四）に創設された<sup>37)</sup>。明治八年（一八七五）制定の華族会館章程によると、その趣旨は国民の模範として華族が勉学に勤しむための施設で、当初は和漢洋学の連続講座が開設されたが、後に法律学や海外事情など社会情勢に即した講演会が企画されている。また、スポーツや芸術、伝統文化に関する学習活動も行われ、学習を通じた同一階級のコミュニケーション形成や、華族同士の交際を深めるための社交の場ともなった。伊藤真希は、華族会館の意義を「ノンフォーマル学習とインフォーマル学習のどちらも含んだ多様な学習活動の機会を、華族社会に提供していた」と評価している。日本考古



右より坪井正五郎、二条基弘公爵、井上清助、住廣造

図7 華族会館大広間での博多人形陳列会 東京大学大学院情報学環所蔵

学史上特筆すべき講演会としては、明治一二年（一八七九）七月のモールス（Edward Sylvester Morse）による「動物成長ノ怪異」、「蟻ノ奇ナル習慣」、「人生ノ原由」及び「日本ノ古人種」の連続講演がある<sup>①</sup>。

人類学講話会以外に華族会館で開催された考古学、人類学に関連する行事に、明治四四年（一九一）四月一六日、二条基弘公爵ら華族人類学会と坪井正五郎による博多人形陳列会がある（図7）。これは明治四〇年（一九〇七）、博多人形師の井上清助が坪井正五郎の人類学通信教育を受け、その縁で当時販売不振に陥っていた博多人形の活路を相談したことに端を発する<sup>②</sup>。坪井正五郎は明治三三年（一九〇〇）に東洋社から販売された『歴史教授用標本』の製作指導を行っており<sup>③</sup>、考古学や歴史学、人類学に関する教材模型標本を博多人形で製作、販売することを提案する。これを受けて製作されたのが、所謂「井上式地理歴史標本」で、『国定教科書と連絡したる上代工芸品模型』、『石器時代上代遺物模型』、『埴輪模型』（以上、坪井正五郎及び柴田常恵選定）、『世界人種模型』、『日本帝国人種模型』（以上、坪井正五郎及び松村瞭選定）が販売された<sup>④</sup>。図8は島津製作所が支



図8 高津製作所標本部『世界人種ヲ示ス標本』 京都府立鴨沂高等学校所蔵

援し、博多人形師の手で製作された『世界人種ヲ示ス標本』で、ブリントン (Daniel Garrison Britton) の人種分類案に基づき、「マオリ種族」、「バリ種族」、「イタリー人」、「支那人」及び「ユータ種族」の男女一〇体一組で構成される<sup>45)</sup>。

博多人形陳列会は、所謂「井上式地理歴史標本」の完成を記念し、華族へ披露することを目的とした展示実演会であった。華族会館大広間には考古学や人類学に関する教材模型標本をはじめ、各種博多人形約二〇〇体が陳列され、蜂須賀正韻侯爵持参の京人形を井上清助と小島與一が模造する実演も行われた。当日は華族当主とその婦人、子女ら一〇〇〇名以上の観覧があり、徳川達孝伯爵らによる博多人形の買上げもあった。『都新聞』<sup>46)</sup>をはじめ新聞各紙が陳列会を取り上げたことも相俟って、教材模型標本のみならず以後の博多人形業界全体の盛況へと結実したのである。

#### 小 結

二条基弘公爵の考古学研究は、主に美術的な価値を有する考古遺物の収集や坪井正五郎による講義の聴講など、屋内研究が中心であった。野中完一を資料収集調査に派遣したり、伝岡山県足守出土銅鐸など考古遺物の優品を蒐集するなど、こうした研究活動は莫大な資産を背景にして



初めて行い得ることであった。

宮城県一塚古墳出土の家形石棺をはじめ、多くの研究者や郷土史家が資料を寄贈していることは、公爵家への寄贈が名誉な行為であると社会的に認識されていたためではないかと思われる。『銅駝坊陳列館一覽 附本館創立五週年紀念陳列品目録』<sup>⑦</sup>において、寄贈者芳名、寄贈回数及び点数を詳細列記していることは、寄贈者に対する二条基弘公爵の配慮と捉えることもできる。そして、収集された考古遺物は、坪井正五郎の要請により東京勸業博覧会内に開設された東京府管内太古遺物陳列場や石器時代土偶研究展覧会を通じて広く公開された。

二条基弘公爵はまた同じ趣向の華族と華族人類学会を組織し、東京人類学会の遠足会や年会へ参加することで、当時の学界の中で華族の地位を確立していった。二条基弘公爵は公務で九州出張する野中完一に旅費を提供し、蜂須賀正韻侯爵及び徳川頼倫侯爵は、鳥居龍藏の中国東北部出張に際して物品を寄附するなどしている。<sup>⑧</sup> こうした研究活動への金銭的な支援が、学界における華族の地位を保証する要因であったことは、阿部正功子爵においても言えることであろう。

二条基弘公爵や華族人類学会による考古学研究は、国民の模範としての役割を担った華族が、「人類学」という新興学問を一つの嗜みとして身につけようとしたことに端を発すると思われる。しかし、華族会館における人類学講話会や博多人形陳列会、銅駝坊陳列館の開設など、その域は華族の生涯学習という範疇を大きく超えていたのである。

- ① 八木契三郎編「貴公子の貝塚調査」『東京人類学会雑誌』第一五巻 第一六四号、一八九九年、八五頁、東京人類学会事務所
- ② 八木契三郎編「貴族と貝塚調査」『東京人類学会雑誌』第一五巻第一一五号、一八九九年、一二五頁、東京人類学会事務所
- ③ 八木契三郎編「東京人類学会」『東京人類学会雑誌』第一六巻第一八二号、一九〇一年、三四七頁、東京人類学会事務所
- ④ 草村松雄編「東京人類学会記事」『人類学雑誌』第二九巻第一号、一九一四年、四二―四三頁、東京人類学会事務所
- ⑤ 八木契三郎編「貴族諸氏の人類学講話会」『東京人類学会雑誌』第一七巻第一九一号、一九〇二年、二二頁、東京人類学会事務所
- ⑥ 大野延太郎編「二條公爵の人類学標本室」『東京人類学会雑誌』第一八巻第二〇〇号、一九〇二年、八三頁、東京人類学会事務所
- ⑦ 松村瞭編「石器時代人民生活状態想像図(中絵)―厚意を謝す」『東京人類学会雑誌』第二二巻第二五五号、一九〇七年、四〇―四二頁、東京人類学会事務所
- ⑧ 江見忠功「『コロボックルの村』に題す」『地底探検記』一九〇七年、

- 一七九—一八六頁、博文館
- ⑧ 平田健「二条基弘公爵宛坪井正五郎自筆書簡——華族の人類学研究への *prelude*——」『土庫』第一三二号、二〇一七年、二三頁、公益財団法人 古代学協会
- ⑨ 佐々木利和「博物館書目誌稿 帝室本之部 徳川頼貞氏寄贈品のうち銅駝坊旧蔵書一」『MUSEUM』第五六〇号、一九九九年、二五一—六二頁、東京国立博物館
- ⑩ 松村瞭編「神生貝塚の発掘」『東京人類学会雑誌』第二卷第二四号、一九〇六年、二八九頁、東京人類学会事務所
- ⑪ 今西龍「神生貝塚記事（第三）」『東京人類学会雑誌』第二卷第二四号、一九〇六年、二六五—二七六頁、東京人類学会事務所
- ⑫ 江見水蔭「大森貝塚の発掘」『地中の秘密』一九〇九年、一五三—一六二頁、博文館
- ⑬ R.T.「東京人類学会挙行遠足会の記」『東京人類学会雑誌』第一九卷第二四号、一九〇四年、一〇二—一〇頁、東京人類学会事務所
- ⑭ 註⑥に同じ。
- ⑮ 『銅駝坊陳列館一覽 附本館創立五週年紀念陳列品目録』一九〇九年、銅駝坊陳列館
- ⑯ 銅駝坊という名称は、長安に銅製の駱駝像が置かれていた区域が平安京の条里上、二条通に当たっていたことに因むもので、二条家が東京移住後に記された日記『銅駝坊日次』にも、その名を見て取ることができる。
- ⑰ 註⑮に同じ。
- ⑱ 松村瞭編「坪井教授の帰京」『東京人類学会雑誌』第二卷第二五号、一九〇七年、五一—五二頁、東京人類学会事務所
- ⑲ 小金井良精「日本石器時代の赤き人骨に就て」『人類学雑誌』第三卷第一号・第二号、一九二〇年、二七五—二八三頁、東京人類学会事務所
- ⑳ 註⑮に同じ。
- ㉑ 酒巻忠史「高橋健自、森本六爾、大場磐雄と長州塚——古記録に見る銚子塚古墳について——」『日本考古学史研究』第五号、二〇一七年、四三—六八頁、日本考古学学会
- ㉒ 梅原未治「(五) 伝足守町発見銅鐸」『銅鐸の研究』資料篇、二六四—二六六頁、大岡山書店
- ㉓ 内田晋次郎編「陸前名取郡茂ヶ崎村古墳発見の石棺」『人類学雑誌』第二七卷第七号、一九一一年、四四二—四四四頁、東京人類学会事務所
- ㉔ 村野正景・平田健「京都府立鴨沂高等学校所蔵の考古・人類学模型標本について——人種模型標本に関する学史的考察——」『朱雀』第二八集、一一—一八頁、京都府京都文化博物館
- ㉕ 註⑮に同じ。
- ㉖ 和田千吉「二条公爵家の記念陳列」『考古界』第八編第九号、一九〇九年、三八六頁、考古学会
- ㉗ 松村瞭「二条公爵家の陳列館」『東京人類学会雑誌』第二五卷第二八号、一九〇九年、一一七—一九頁、東京人類学会事務所
- ㉘ 石井清編「二条家陳列の石棒石剣」『考古界』第八編第一二号、一九一〇年、五三四—五三九頁、考古学会
- ㉙ 松村瞭編「坪井理科大学教授の演説講話」『東京人類学会雑誌』第二五卷第二九号、一九一〇年、三六三—三六四頁、東京人類学会事務所
- ㉚ 『帝室博物館年報』昭和二年自一月至十二月、一九二八年、帝室博物館
- ㉛ 坪井正五郎「東京府管内太古遺物陳列場」『東京人類学会雑誌』第二卷第二五七号、一九〇七年、四四九—四五八頁、東京人類学会事務所

務所

- ③0 松村瞭編「石器時代土偶研究展覧会」『東京人類学会雑誌』第二五卷第二八八号、一九一〇年、二三九―二四三頁、東京人類学会事務所
- 松村瞭編「石器時代土偶及び土版（口絵説明）」『東京人類学会雑誌』第二五卷第二八九号、一九一〇年、二七九―二八一頁、東京人類学会事務所
- ③1 註⑤に同じ。
- ③2 八木契三郎編「華族会館人類学講話会」『東京人類学会雑誌』第一七卷第一九六号、一九〇二年、四二―四三頁、東京人類学会事務所
- ③3 松村瞭編「華族人類学会講義結了証」『東京人類学会雑誌』第二〇卷第二九号、一九〇五年、三三七―三三八頁、東京人類学会事務所
- ③4 松村瞭編「エジプト意匠の文房具」『東京人類学会雑誌』第二二卷第二五〇号、一九〇七年、一七二―一七三頁、東京人類学会事務所
- ③5 坪井正五郎「人類学講話（一）」『東京人類学会雑誌』第二三卷第二六五号、一九〇八年、二五五―二五七頁、東京人類学会事務所
- ③6 松村瞭編「入会者」『東京人類学会雑誌』第一九卷第二二一号、一九〇四年、四五二頁、東京人類学会事務所
- ③7 註⑬に同じ。
- ③8 松村瞭編「本会創立滿二十二年会」『東京人類学会雑誌』第二二卷第二四七号、一九〇六年、三〇―三四頁、東京人類学会事務所
- ③9 『華族会館沿革略史』一九二五年、華族会館

『華族会館史』一九六六年、社団法人霞会館

- 前掲小田部雄次「華族 近代日本貴族の虚像と実像」
- ④0 伊藤真希「華族の成人学習——華族会館における活動に着目して——」『日本生涯教育学会論集』三六、二〇一五年、一三―二二頁、日本生涯教育学会
- ④1 内藤政恒「モールの講演と欧化思想の潜在」『考古学ジャーナル』第六号、一九六七年、二頁、ニュー・サイエンス社
- ④2 井上清助「博多人形 井上清助奮闘五十年史」抄『博多人形沿革史』二〇〇一年、九四―一〇六頁、博多人形商工業協同組合
- ④3 平田健「学校教育における考古資料教材の開発とその学史的意義——ドルメン教材研究所「古代土器複製標本」の評価をめぐって——」『学習院大学史料館紀要』第一七号、二〇一一年、一―二六頁、学習院大学史料館
- ④4 北垣恭次郎「教授用具としての井上式博多人形」『教育研究』第一二八号、一九一四年、九九―一〇一頁、初等教育研究会
- ④5 註⑭に同じ。
- ④6 宮武外骨編「博多人形陳列会（都新聞）」『人形雑誌』上篇、一九一一年、二六頁、雅俗文庫
- ④7 註⑮に同じ。
- ④8 松村瞭編「華族諸君の人類学的旅行家補助」『東京人類学会雑誌』第二〇卷第三三三号、一九〇五年、四九〇頁、東京人類学会事務所

### 第三章 阿部正功子爵、二条基弘公爵と坪井正五郎の関係

阿部正功子爵や二条基弘公爵の考古学研究において坪井正五郎が果たした役割については、第一章及び第二章で概述したとおりである。坪井正五郎は華族に「人類学」を教授し、遺跡踏査や発掘、陳列館の設置に際して人類学教室員を派遣、

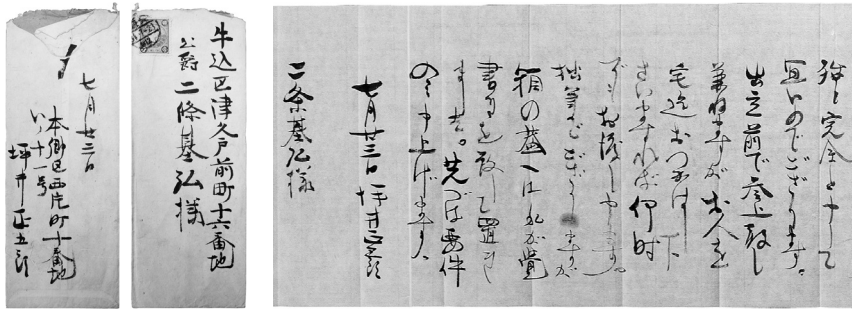
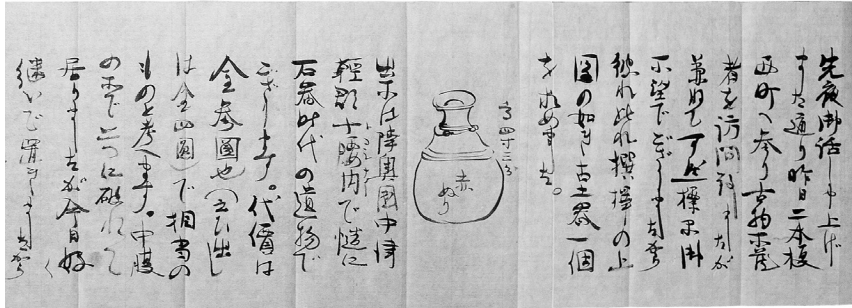


図9 二条基弘公爵宛坪井正五郎自筆書簡 公益財団法人 古代学協会所蔵

推薦するなど華族の考古学研究を支援した。一方の華族は、機関誌の発行や調査旅行において金銭的な援助を行うだけでなく、蒐集した膨大なコレクションを研究に供するなど、研究者の活動を支えた。

坪井正五郎はまた、華族の資料蒐集にも積極的に関与している。図9は明治三四年（一九〇一）七月に坪井正五郎が二条基弘公爵に宛てた書簡である。その内容は、二条基弘公爵が所望していた標本用の壺形土器を古物所蔵者から三円で購入したこと、胴部で二つに割っていたものを接合し、箱書きした共箱を用意したので引き取りに来てほしい旨が記されている。

二条基弘公爵が邸内に銅駄人類学室を開設し、本格的な資料蒐集を開始したのが明治三五年（一九〇二）以降であるから、本壺形土器はそれを遡る初期のコレクションに位置付けることができる。坪井正五郎は考古遺物などへの蒐集欲が全くないことで知られていたが、「他人の苦心慘憺、憂身をやつして蒐集に力むるものに対し、敢て之を軽侮することなく、寧ろ或便宜を計るだけの余裕を以て」<sup>②</sup>いたという。

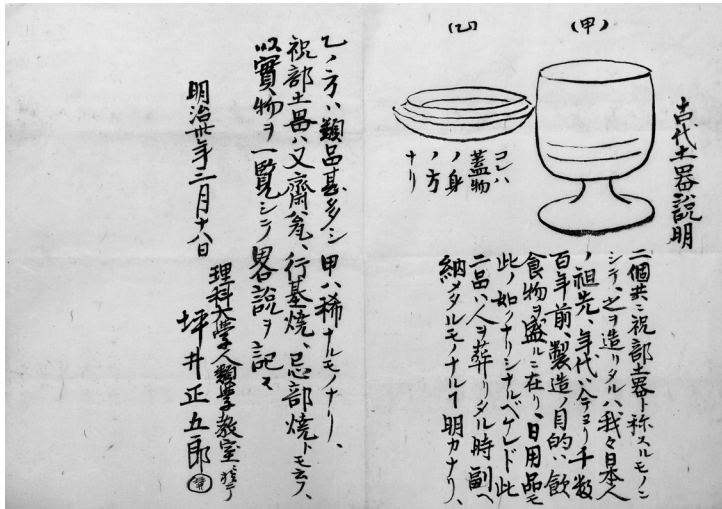


図10 坪井正五郎筆『古代土器説明』 個人蔵・学習院大学史料館保管

図9の壺形土器の箱書きを行っていたように、坪井正五郎は華族の収蔵品の鑑定を引き受けることもあった。図10は明治三〇年（一八九七）一月に愛知県碧海郡の中世阿部氏旧待屋敷から出土し、阿部家墓所世話方から献納された須恵器二点の鑑定書である。坪井正五郎は、これら「祝部土器」が千數百年前に日本人の祖先が作ったもので、古墳の副葬品であると説明、乙の蓋物の身は一般的だが、甲の脚付碗は稀であると評している。記載された内容から、明治三〇年（一八九七）三月一八日に、阿部正功子爵が理科大学人類学教室に須恵器を持ち込み、坪井正五郎がその場で鑑定書を書いたことがわかる。

江戸時代中期に奇石愛好家が輩出して以降、考古遺物の贗作が流通するようになるのだが、明治時代以降は碧玉製釧など金銭的価値の高いものが作られ、その模造技術も格段に進歩している<sup>④</sup>。そのため、古美術商から考古資料を購入する場合は、高度な専門的知識を必要としたのであり、坪井正五郎は華族の資料蒐集に際し、自身の鑑識眼をも提供していたのである。

坪井正五郎による専門的知識の提供は、華族の政治的活動においても認められる。明治三三年（一九〇〇）、二条基弘公爵が街頭となり、アイヌ民族の救済教育を目的として設立された北海道旧

土人救育会に坪井正五郎は幹事として参加している。北海道旧土人救育会の主な事業は、工芸、技術、農事に関する学校建設で、明治三十七年（一九〇四）には虻田学園を開校。坪井正五郎の役割は、虻田学園創設者の小谷部全一郎（東京人類学会会員）を人類学的知識により補佐すること、そして幻燈会や展示を通じてアイヌ民族に関する知識を広く普及することであった。

ところで、阿部正功子爵が地学協会で坪井正五郎と面識を得て、大田区千鳥窪貝塚の踏査を始めたのが明治二十二年（一八八八）。一方で、二条基弘公爵が坪井正五郎らと北区西ヶ原貝塚を発掘したのは明治三十二年（一八九九）であった。阿部正功子爵は明治三〇年代後半、次第に考古学研究から離れていくのであるが、二条基弘公爵とは一時期、東京人類学会や集古懇話会（集古舎）の会員に名前を連ねている。しかしながら、両華族が揃って例会や発掘調査に参加した形跡は管見の限り確認できない。

この点について、阿部正功子爵が遺跡踏査など野外調査を重視していたのに対し、二条基弘公爵は美術的に優品の考古資料を蒐集したり、華族同士の研究組織を構築したりすることに重きを置いていたことなど、考古学研究に対する考え方の相違を指摘することもできる。だが、その理由は華族制度自身に起因すると筆者は考える。

明治一七年（一八八四）制定の華族令に先立ち決定された叙爵内規によると、公爵は「親王諸王より臣位に列せらるる者、旧撰家、徳川宗家、国家に偉勲ある者」、侯爵は「旧清華家、徳川旧三家、旧大藩知事、旧琉球藩王、国家に勲功ある者」、伯爵は「大納言まで宣任の例多き旧堂上、徳川旧三卿、旧中藩知事、国家に勲功ある者」、子爵は「一新前家を起したる旧堂上、旧小藩知事、国家に勲功ある者」とされていた。華族の特権の一つである貴族院の構成においては、三〇歳に達すると公爵及び侯爵は終身議員（無給）、伯爵、子爵及び男爵は同爵間で互選し、任期七年（有給）の議員となることができた。そのため、貴族院内では、研究会（子爵）、扶桑会（伯爵）、火曜会（公爵及び侯爵）が組織され、同爵間において政治的な結束を固める動きが見られる。<sup>⑪</sup>

興味深いのは、こうした爵位による政治的結社の論理が学問の世界にも持ち込まれた可能性があることである。明治三十六年（一九〇三）、華族会館において二条基弘公爵らが人類学講話会を開催していた頃、子爵の一大政治組織であった尚友会から坪井正五郎に対し講義の依頼があった。<sup>12</sup> また、同年七月四日の人類学教室参観においては、徳川頼倫侯爵、浅野長之侯爵及び徳川達孝伯爵が午前、尚友会諸氏数十名は同日午後と八日午後に来室している。<sup>13</sup>

阿部正功子爵の陳列場に華族人類学会のメンバーで参観に訪れたのは、徳川達孝伯爵のみであった。阿部正功子爵と二条基弘公爵が考古学研究において協同しなかったのは、学問の指向性の相違ではなく、爵位という極めて政治的な原理に基づくと考えられるのである。

以上のように、阿部正功子爵と、二条基弘公爵を中心とする華族人類学会の考古学研究は、坪井正五郎を要に展開していた。従って、大正二年（一九一三）五月、第五回万国学士院連合大会出席のため渡航していたサンクトペテルブルクで坪井正五郎が客死すると、華族と考古学の距離は急速に広がっていく。阿部正功子爵の名前は、大正五年（一九一六）一月発行の『東京人類学会会員名簿』<sup>14</sup>には記載がなく、二条基弘公爵の銅駝坊陳列館収蔵品は大正一〇年（一九二一）に徳川頼倫侯爵の所有となり、昭和二年（一九二七）その長男徳川頼貞公爵により、東京帝室博物館に寄贈された。<sup>15</sup> 明治期の華族による考古学研究は、坪井正五郎の逝去と軌を一にして終焉を迎えたのである。

- ① 前掲平田健「二条基弘公爵宛坪井正五郎自筆書簡——華族の人類学研究への *prelude* ——」 念論文集刊行会
- ② 柴田常恵「坪井正五郎先生を語る」『趣味の考古学』一九三七年、一五八—一六四頁、雄山閣
- ③ 阿部家史料一四一〇—二
- ④ 清野謙次「古物の偽造と其鑑定」『随筆・遺稿』故清野謙次先生記 念論文集 第三輯、一九五六年、二五六—二七八頁、清野謙次先生記
- ⑤ 須永次郎編「北海道土人教育会」『児童研究』第三卷第二号、一九〇〇年、四八頁、教育研究所
- ⑥ 榎本勝多編「北海道土人教育会」『東洋学芸雑誌』第二二七号、一九〇〇年、三六三—三六四頁、東洋学芸社

⑦ 八木契三郎編「アイヌ教育とアイヌ調査」『東京人類学会雑誌』第一五卷第一七一号、一九〇〇年、三七八―三七九頁、東京人類学会事務所

⑧ 濱中仁三郎編「北海道旧土人教育会の計画」『教育報知』第六四一号、一九〇〇年、六頁、教育報知発行所

八木契三郎編「アイヌ現状幻燈会」『東京人類学会雑誌』第一六卷第一八二号、一九〇一年、三四四―三四五頁、東京人類学会事務所

⑨ 丸山美季は、阿部正功子爵が考古学研究から距離を置くようになった理由として、四〇代という年齢、二条基弘公爵との関係及び日清・日露戦争を経て考古学が帝国主義の影響を受けざるを得なくなった点を挙げている。

前掲丸山美季「阿部正功の生涯と学問——人類学・土俗学・考古学——」

しかし、土俗会を共同で開催、運営した鳥居龍藏との交誼は終生続いている。阿部正功子爵は明治三二年（一八九九）に京都で大原女の風俗調査を行っており、陳列館内部を撮影した写真には民具資料が散見される。また、『東京朝日新聞』連載「府下の奇癖家」では、「田舎風俗癖」と紹介されるなど、阿部正功子爵が考古学から離れていったのは、今日の民俗学に傾倒したことが一因ではないかと考えている。この点については、阿部家史料中、明治三〇年代後半以降の日記類を丹念に精読していく必要がある。

「府下の奇癖家（廿八）田舎風俗癖 阿部子爵」『東京朝日新聞』

## おわりに

明治期の華族による考古学研究は、阿部正功子爵のフィールドワークを中心とした基礎研究と、二条基弘公爵の考古遺

第五〇八四号、一九〇〇年、五頁、東京朝日新聞会社

⑩ 酒巻芳男「華族制度の研究」第一輯、一九八七年、社団法人霞会館

⑪ 前掲小田部雄次「華族 近代日本貴族の虚像と実像」

⑫ 大野延太郎編「子爵団体尚友会に於ける人類学講義」『東京人類学会雑誌』第一八卷第二〇二号、一九〇三年、一六五頁、東京人類学会事務所

⑬ 大野延太郎編「華族諸氏の人類学教室參觀」『東京人類学会雑誌』第一八卷第二〇八号、一九〇三年、四二七頁、東京人類学会事務所

⑭ 石田収蔵編「東京人類学会會員名簿」一九一六年、東京人類学会事務所

⑮ 高木文「採集家漫言（其の二）」『人類学雑誌』第三七卷第一号・第二号・第三号、一九二二年、五六―五九頁、東京人類学会事務所

吉田義次編「学会動静」『考古学雑誌』第一七卷第一号、一九二七年、七三頁、考古学会

なお、銅駝坊陳列館収蔵品のうち、石棒など考古遺物や岩手県中沢浜貝塚出土石器時代人骨は東京帝国大学理科大学（現在は東京大学総合研究博物館所蔵）に寄贈されていたことが、最近の調査で明らかになった。一部資料には、「銅駝人類学室」の記載があるラベルや、「銅」の朱文稜鏡印が押印されたラベルが添付されている。

諏訪元・佐宗亜衣子・水嶋崇一郎・初鹿野博之「人類先史、曙 東京大学総合研究博物館所蔵 明治期等人類学標本一〇一点写真集」二〇一七年、東京大学出版会



物蒐集や華族の学問上の派閥化という二つの指向性が存在した。特に遺跡範囲の認識や、石器の実測<sup>①</sup>などの考古学研究は、今日の研究水準に照らし合わせても早熟であり、海外の研究を独自に学んでいた可能性を示唆している。こうした二つの指向性は、直接的な関係は見られないものの、ドイツ留学でシュミット (Hubert Schmidt) に師事し、昭和四年 (一九二九) に大山史前学研究所を設立、自身が提唱した史前学に基づき日本の石器時代文化研究を推進した大山柏公爵にも通底する。<sup>②</sup> 潤沢な資産を背景とした調査旅行、資料蒐集や陳列館の開設、海外の研究成果の積極的な吸収、そして社会的信用がフィールドワークや資料の寄贈の際に優位に働いていたことは、明治期に限らず華族の考古学研究の特性といえるだろう。

阿部正功子爵や二条基弘公爵の指導的立場にいた坪井正五郎は、華族に「人類学」の知識を提供し、政治的活動など他分野での助言も行った。一方の華族は坪井正五郎や考古学者に対し、金銭的援助や蒐集品の提供、学会での名誉職への就任を通じて研究活動を支援した。

坪井正五郎は当時新興学問であった「人類学」普及のため、講演や雑誌、新聞への寄稿、三越呉服店の流行会や児童用品研究会での共同開発、学校教材標本の製作指導及び絵葉書図案の作成などを行っていた。<sup>③</sup> その眼差しは常に大衆に向けられており、明治四四年 (一九一七) に華族会館で催された博多人形陳列会や北海道旧土人救育会での普及活動は、華族という特権階級や為政者を通じて「人類学」が社会に肝要であることを顕示する重要な機会となったのである。

また、「爾来一部の華族社会に貝塚探験隊組織の目論ありとの事なるが此高尚なる學術的娯楽ハ近来益々墮落せんとする華族社会の悪風習を救済するに其効果少なからざるべし」という新聞記事から、華族の考古学研究は当時の社会に好意的に受け入れられていたことがわかる。国民の上に立ち、その模範となることを希求された華族にとっても、考古学研究はノブレス・オブリージュを充分果たすものであった。

このように、阿部正功子爵と二条基弘公爵の考古学研究は、華族人類学会や同爵の政治的結社を通じて高位のネット

ワークの中で華族の教養として周知された。そして、華族に付与された社会的影響力により、その有用性が広く大衆に宣伝されたのである。

ただし、人類学講話会での講義内容は、明治三十三年（一九〇〇）八月に信濃教育会支部東筑摩交詢会主催で開催された夏期講習会<sup>⑤</sup>や、明治三十六年（一九〇三）から明治三十七年（一九〇四）にかけて東京高等師範学校地理歴史科学生に対して行われた人類学講義<sup>⑥</sup>の内容とほぼ同じである。また、資料蒐集に際しての斡旋も華族に限ったことではなかった。

明治三十一年（一八九八）三月、坪井正五郎は東京府知事から委嘱を受けて港区芝丸山古墳の発掘調査に着手した。調査当初、阿部正功子爵は見学に通うだけであったが、担当者であった野中完一から調査補助の依頼を受けて、途中から本格的に調査に参加する。その時の調査記録である『芝丸山古墳調査略記』<sup>⑦</sup>には、試掘坑で検出された層状に堆積した鉄分の解枳をめぐり、土工の所見を聴取した上で、坪井正五郎や野中完一の見解を批判している。このように、坪井正五郎と阿部正功子爵や二条基弘公爵ら華族は、学問の上において対等な関係であった。

華族会館では人類学講話会のほかにも坪井正五郎による「人種談」（明治三十五年一月、火曜会）などの講演<sup>⑧</sup>が催され、明治四二年（一九〇九）四月には徳川家達公爵の家庭茶話会で「諸人種の身体裝飾」<sup>⑩</sup>が講話されている。国民の模範として様々な知識や教養が求められた華族が、その生涯学習や家庭教育に「人類学」を採用したのは何故であろうか。

明治二〇年代後半以降、日本は帝国主義政策により、台湾、南樺太、中国東北部及び朝鮮半島を植民地とし、現地での統治政策を展開していく。その施策に人類学は重要な学問であった。<sup>⑪</sup>この時期、華族会館主催の講話会でも国際関係や海外情勢が主題に多く取り上げられている。<sup>⑫</sup>また、大正一二年（一九二三）九月の関東大震災で焼失した学習院の地理歴史標本室に、高松宮が逸早く寄贈したのは、「日本領土人種模型」や「台湾生蕃種族写真帖」<sup>⑬</sup>である。貴族院議員や官僚、軍属として国家への貢献が期待されていた華族にとって、「人類学」は植民地政策に必須の学問であった。

そして、もう一つの理由が近代化や植民地政策を背景に萌芽してきた日本人とは何かという帰属意識である。二条基弘

公爵は「特に我々日本人に取りましては、此の日本の地に於ける太古時代の事実をば明かにして且我々日本人自身のなり立ちを調べるに当りまして最も必要であつて趣味の深いものと思ひます」と考古学の意義を説明している。阿部正功子爵が後年傾倒した土俗学も、諸地方住民の風俗習慣を通して考古遺物の製作や使用方法を明らかにする学問であった。<sup>15</sup>しかしながら、坪井正五郎は有力な先輩から、当時の極端な欧化思想とその反動としての保守思想の中で研究を進めるにあたり、日本民族の起源については慎重な態度をとるべきであるという注意を受け、終生その態度を貫いたとされる。<sup>16</sup>皇室の藩屏として天皇を守る特権集団であつた華族が、自己矛盾を内包した「人類学」とどう対峙したのか。本稿の課題を明記し、擱筆したい。

- ① 前掲『ふくしま考古学研究の春暁——棚倉式土器の発見・新地貝塚の発掘——』
- ② 阿部芳郎『失われた史前学 公爵大山柏と日本考古学』二〇〇四年、岩波書店
- ③ 前掲平田健「日本考古学史における近世と近代」
- ④ 「華族の新娯楽(貝塚探検)」『都新聞』第四五二三号、一九〇〇年、二頁、都新聞社
- ⑤ 八木契三郎編「松本に於ける人類学講習会」『東京人類学会雑誌』第一五卷第一七四号、一九〇〇年、五〇二—五〇三頁、東京人類学会事務所
- ⑥ 坪井正五郎『人類学講義』一九〇五年、国光社
- ⑦ 阿部家史料一四—二二
- ⑧ 前掲高山優「芝岡山古墳調査略記」について
- ⑨ 守屋幸一編『明治・大正期の人類学・考古学者伝』二〇一二年、板橋区立郷土資料館
- ⑩ 前掲松村暎編「坪井理科大学教授の演説講話」
- ⑪ 坂野徹『帝国日本と人類学者 一八八四—一九五二年』二〇〇五年、勁草書房
- ⑫ 前掲伊藤真希「華族の成人学習——華族会館における活動に着目して——」
- ⑬ 前掲平田健「学校教育における考古資料教材の開発とその学史的意義——ドルメン教材研究所『古代土器複製標本』の評価をめぐって——」
- ⑭ 二条基弘「考古学の趣味」『科学世界』第三卷第六号、一九一〇年、六七—六八頁、科学世界社
- ⑮ 坪井正五郎「考古学と土俗調査」『考古学会雑誌』第一編第三号、一八九七年、二二六—二三〇頁、考古学会仮事務所
- ⑯ 山崎直方「故坪井会長を悼む」『人類学雑誌』第二八卷第一一号、一九一四年、六六五—六七頁、東京人類学会事務所

謝辞

本稿執筆に当たり、『陸奥国棚倉藩主・華族 阿部家資料』の調査並びに掲載に際し、阿部家当主の阿部正靖氏より御高配を賜りました。また、以下の方々、研究機関より御教示並びに御配慮を賜りました。ここに明記し、深く御礼を申し上げます（順不同、敬称略）。

麻森敦子、飯田茂雄、岡田茂弘、河野正訓、品川欣也、島田雄介、鈴木希帆、高山優、長佐古美奈子、平田さゆり、丸山美季、村上由美子、村野正景、山田英明、横山操、吉井秀夫、学習院大学史料館、京都大学総合博物館、京都府京都文化博物館、京都府立鴨沂高等学校、公益財団法人 古代学協会、東京国立博物館、東京大学大学院情報学環

末筆ながら、私がこれまで指導を受けて来た諸先生方の中で最も厳しかった先師、故山中一郎先生に拙稿を捧げる。

（東京都教育庁地域教育支援部）

Archaeological Investigations by Viscount Abe Masakoto and  
Prince Nijō Motohiro in the Meiji period of Japan

by

HIRATA Takashi

This article clarifies the historical significance of archaeological investigations by members of the peerage, the ennobled privileged class of the Meiji period, and the role their investigations played in the spread of the then-new field of archaeology in Japanese society.

Tsuboi Shōgorō, who was promoted archaeological studies at Tokyo Imperial University from the Meiji Period through the early Taisho Period, made public the results of his research through many media. He thought that relations with members of the peerage who were well versed in archaeology were one method of diffusing his conception of “Anthropology” (which would include present-day Archaeology, Anthropology and Ethnology). Viscount Abe Masakoto (1860–1925) and Prince Nijō Motohiro (1859–1928) in particular were members of the peerage who were positively involved with archaeological studies.

The attitudes Viscount Abe and Prince Nijō toward archaeological studies varied greatly. However, what they had in common was great wealth that they used to provide monetary support for the excavations of Tsuboi and other archaeologists, and the building of private museums within the grounds of their residences. They were also appointed to honorary posts in the Anthropological Society of Tokyo and the like.

Viscount Abe, who had started to interact with Tsuboi in 1887, thoroughly surveyed and excavated Stone-age sites centering on Azabu Ward (present-day Minato Ward), where his residence was located, as well as others in the Tokyo and Saitama areas. He discovered 68 Stone-age sites and 23 more dated to the Kofun period. He made site maps based on his investigations, and these achievements set the precedents for today’s archaeology.

Prince Nijō, on the other hand, became interested in archaeology from around 1899. He actively purchased archaeological artifacts that had high artistic value such as intact pottery or *dōtaku* (bronze bells). This huge

collection was housed in his private museum, known as the Dōdabō Chinretsukan. Prince Nijō also invited Tsuboi to give lectures on archaeology at the Peers' Club from 1902 to 1905. He organized the Kazoku Jinrui Gakkai (Peer's Anthropological Society) along with four other members of the peerage and participated actively in the society.

Tsuboi provided the latest knowledge of archaeology to the peers and gave some suggestions in the other areas such as political activities. Thus archaeology came to be seen as part of the basic education of members of the peerage through the network of the Kazoku Jinrui Gakkai or political parties associated with the peerage. Recognition of the social usefulness of archaeology was diffused widely due to the social impact that was allotted to the privileged class of the peerage.